上村松園《人生の花》の制作過程に関する—試論

<table>
<thead>
<tr>
<th>著者</th>
<th>國永 裕子</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>人文論究</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>号</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>29-51</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>2013-02-10</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://hdl.handle.net/10236/11017">http://hdl.handle.net/10236/11017</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
上村松園《人生の花》の制作過程に関する一試論

－はじめに－

国永裕子

生涯にわたり理想の女性像を追求した日本画家上村松園（一七五〇—一九四九）は、明治三三年（一九〇〇）第九回日本絵画協会・第四回日本美術院連合絵画共進会へ《花ざかり》を出品した。作品の題材を得た本作品が銀牌三席を受賞し、若手画家として一躍その名を挙げたことはよく知られる。ところが惜しまれることに《花ざかり》は今日所在が明らかではない。上記展覧会に出品された当时に撮影されたモノクローム図版（図1）が、不鮮明であるにも関わらず本作品を知る上で貴重な手がかりとなり得るからである。松園の画業が成熟を迎える昭和期に《花嫁》（昭和一〇年・奈良ホテル所蔵）のような制作例は挙げられるが、婚礼あるいは花嫁そのものを題材とする作品は画業の初期に当たる明治三三年（一八九〇）の〈花嫁〉その作品も、松園の年譜に必ず記される事項である。この作品が同様の題名を有する〈人生の花〉の題名表記を伴う簡略な図版（図2）によって、《人生の花》も婚礼に取材する一作品であるとの推測が可能となる。
上村松園《人生の花》の制作過程に関する一試論

図2「人生の花 上村松園女史筆」
「読売新聞」(明治32年8月7日)
掲載図版

図1《花さかり》
「日本美術」第24号
(明治33年11月)掲載図版

興味深いのは「人生の花」の題名を持つ作品が、
上述の明治三二年第五回新古美術品展覧会出品画と
して制作された一件限りではないことである。「人生
の花」の題名で知られる作品は二点が現存し(図
3・図4・図5)、これら三点の互いに似通った構
以上から留意すべきは、明治三二年第五回新古美
術品展覧会出品画《人生の花》と、三点の現存作品
《人生の花》が図様を異にすると推察される点であ
る(2)。恐らく同じ題名で伝世されてきたために、両
者の同図様を有することは当然のように従来は考え
られてきた。通説では明治三二年と翌三三年の二度
にわたり、松園は同一作品ではないにしご似通った
図様の作品を各別の展覧会へ出品したことになる。
新たな図様を考察し展覧会出品に臨んだのでは
ないだろうか。
図4 《人生の花》
絹本彩色 軸 175.5×101.0 cm
京都府美術館

図3 《人生の花》
絹本彩色 軸 163.8×85.4 cm
名都美術館

図7 《よそはい》明治35年頃
絹本彩色 軸 95.0×53.0 cm
福富太郎コレクション資料室

図5 《人生の花》
絹本彩色 軸 161.0×86.5 cm
京都府美術館
図9 柳沢周延
《千代田之大奥 お召かへ》（部分）
明治28年 三枚絹錦絵

図8 喜多川歌麿
《風俗美人時計 亥ノ刻 芸者》
寛政12年 大判錦絵

図15《花嫁》 明治32年
絹本彩色 軸
125.4×25.2 cm

図14《母》 明治32年
絹本彩色 額
120.5×25.2 cm
吉野石膏株式会社

図13《母と娘》下絵
173.4×93.2 cm
松阪美術館
先に述べた研究では、『人生の花』を中心とする先代研究を確認する。次に、『人生の花』の制作についての關注的な研究が行われた。その中で、松村の作品『人生の花』は、詳細な研究を必要とするものである。従って、類似した構図の存在を確認する。複数の作品を通じて、『人生の花』に対する具体的な研究が進まれている。

【先行研究-现存作品《人生の花》を中心に】

第九回日本絵画協会・第四回日本美術院連合絵画共進会出品画『花ざかり』は、出版年を越えて、松村の画業上の重要な一部である。既述のように従来、三原の现存作品『人生の花』は、同じ題名を有するためか、明治三二年第五回新古美術品展覧会出品画『人生の花』と混同され、既述のように従来の記載は、『人生の花』が存在するという状況を説明する。中でも名古美術院所蔵作品である作品が候補に挙がる矛盾した状況は、出版年の見方から、京都市美術院所蔵作品であるものと見なす記載が過去に少なくない。一点に限られるはずの展覧会出品画に複数の作品が候補に挙がる矛盾した状況を説明する。

平成二年（二〇〇〇）に東京国立近代美術館および京都国立近代美術館において開催された『上村松園展』は、長らく公開の機会に恵まれなかった初期の作品を含む本画八点、素描七点を紹介し、近年では最も大規模な松村作品の回顧展となった。展覧会には現存する三原の『人生の花』が出版されたが、第五回新古美術品展覧会出品画に関する記載はもはや見られる。
三  第五回新古美術品展覧会出品画「人生の花」の制作

松園は、明治三年四月一日から五月二〇日にかけて京都で開催された第五回新古美術品展覧会「新製品図画」の一部に「人生の花」を掲載した写真図版版を出版したが、この『人生の花』は明治三年に制作されたと断定するためには、現存作品と同名作品の展覧会出出品目とを立証する必要がある。従来の有力な手がかりとされたのが、明治三年二年における『人生の花』に題された複数の『人生の花』が明治三年に制作されたことを具体的に裏付けるのは、現状では難い。この保存在しないランプを指すのかは悩ましい。

上村松園『人生の花』の制作過程に関する一試論
人生の花を表現した「人生の花」

上村松園は、人生の花を表現した「人生の花」を制作するために、松園女史筆の一版画『人生の花』の原版を基に、花嫁の着付けをする女性の姿を描いたとされる写真版『人生の花』がよく知られている。この版画は、花嫁の着付けを描いたものであり、花嫁の着付けの様子を表現しているものである。

上村松園が制作した「人生の花」は、花嫁の着付けを描いたものであり、花嫁の着付けの様子を表現しているものである。上村松園が制作した「人生の花」は、花嫁の着付けを描いたものであり、花嫁の着付けの様子を表現しているものである。
人生の花

人生の花と題した本は、明治三十八年（1905）に上村松園が発表した作品で、花嫁の着付けを描いた作品として知られている。この作品は、花嫁の着付けを描くことにあわせて、新婦や新郎の関係を描いたものである。

人生の花は、明治三十二年（1900）から開始された「花嫁の着付け」为主题の作品群の一環として制作されたもので、その後も同様の作品が発表されている。

人生の花は、花嫁の着付けを描いた作品として知られているが、花嫁の着付けを描いた他の作品群についても、その後も同様の作品が発表されている。

人生の花は、花嫁の着付けを描いた作品として知られているが、花嫁の着付けを描いた他の作品群についても、その後も同様の作品が発表されている。
四
《花ぎ割り》と現存作品《人生の花》の関係

《人生の花》の第五回新古美術品展覧会出品後、約一年半を経た昭和三十三年一月から二月にかけて、第九回<br><br>本絵画協会・第四次日本美術院連合絵画共進会が東京で開催された。この時、松園の出品画が現存不明の《花ぎ<br><br>割り》である。日本美術院の機関誌に掲載された写真図版は不鮮明ながらも、展覧会出品当時の《花ぎ割り》の図様を<br><br>今に伝える確実な資料と言える。盛装を万端に整えた花嫁はうつむきながら、端正な横顔を見せる。創設から間もない日本美術院の新<br><br>進気鋭の作家と並び、銀牌三席という高評価を受けた《花ぎ割り》が展覧会出品当時、世間でかなりの評判を得たこ<br><br>とは複数の新聞批評記事に物語っている。場中で最も人の目を惹くものといは、先づ京都の上村松園女史が《花ぎ割り》であるか、略<br><br>永洗の如き斬新にあらざして良好品位を有し、月絵の如く真実に依りても面かその弐に陥らず嫉妬を含みて徐々とし<br><br>て墨色を用ひた処にあるのだ。場中に美人細多しと難ど、この画いに、顏色なしといふても好い。こうして《花ぎ割り》の概略をとら

これらの記事には『日本美術』掲載図版の描写内容に一致する文言が見られる。さらに《花ぎ割り》の概略をとら
人生の花の題名で知られる点の現存作品は花さかりと名付けられて然るべきではないだろうか。花さかりは今何処にあるや不明であるが、この『人生の花』は同じ草稿に依ってその後作られたものと思はる、『花さかり』の時風の絵は扇の打ち違へであった。花さかり上村松園
明治三十三年、二十七歳の作。日本美術院第五回展覧会出品と同様で、殆ど同時に出版されたもののが本誌であるが、閲秀作家に此人あり、と東都画壇を側目せしめた飛躍作で、當年院の大家連をさへ後へ瞳若立ちえた評判作である。日本風俗美大成は今日と同様に『人生の花』と表記する一方、『京都に於ける日本畫史』は昭和四年に発行され、ともに現在京都市美術館所蔵の一作品『人生の花』(図4)の図版を掲載する。両書の作品名の表記、解説に注目したい。
次に引用するのは、松園自身が《花さかり》の制作を回想した一節である。晩年でもう遠くない時期においてもな

「花さかり」は彼女にとって思い出深い画期作であったことは疑い得ない。

（略）

ここで、花嫁の設けた姿を身近に見た国際の会社に、松園に作られた作品は、《花さかり》ができると。

（略）

《花さかり》が松園の自画作であり、指導を取引した作品は、《花さかり》のものであるか、附添人母親の責任感のつ

にかかっている。あくまで、花嫁の無心な不安な顔と、附添人の母親の責任感のつよく現れた緊張の瞬間を描く

「花さかり」は私の青春の歌をこ

上村松園《人生の花》の制作過程に関する一試論

（略）

《花さかり》から《花さかり》へ——新図案考案の背景

五

《人生の花》
上村松園《人生の花》の制作過程に関する一試論

的な姿をとられた《花さかり》を、松園は意識的に区別しているように思われてならない。「人生之花」は《花さかり》の成功の陰に隠されなのである。

《人生之花》も、第四回新日本美術品展覧会出品時の新聞批判記事を見る限りは好評であることが窺え、同展覧会においては絵画作品の最高賞である三等賞銅牌を、先輩画家に当たる菊池芳文、田能村直人に次いで受賞している。さらに「人生の花」の画題で制作依頼を受けていることが、松園が認めた書簡により確認される。以下の引用はその一部である。

明治三年二月二日付のこの葉書は、兼ねて揮毫を依頼された「人生の花図」が未だ仕上がっていないことを詫び、翌明治三年四月には完成させる見込みである旨を伝える。いつ頃、どのような経緯から、松園が「人生の花図」の制作依頼を受けたのか、因様はどのようになものか、文面からでは判断できない。推測の域を出ないが、依頼者は第五回新日本美術品展覧会出品画《人生之花》を念頭に、着付けをする花嫁の図様の作品を、当初は求めた可能性が高かった。恐らく《花さかり》の画題で制作依頼をすると考えられるためである。

ところが、繰り返し述べてきたように、《花さかり》とほぼ類似した図様の作品《人生の花》は複数点現存するが、花嫁の着付けを描く《人生之花》と類似する同名作品は現在確認されていない。《花さかり》が生産された生産製造により確認されるためである。

第九回日本美術協会・第四回日本美術院連合絵画大詰合会が開幕しており、花嫁と母親を描く図様を求めるのであれば、恐らく《花さかり》の出品されていった。
花の図

伊藤快彦

これ俳句前上村松園女史が、「人生の花」と題し描いた同図から着想して、多少変化したものの、如く、此点で第

画が女史の作品に騒した處が、名誉の二分たしかに値れるのであるのに、況して遺憾なら、作品も女史の

上とかいへぬ、か、すること八今後注意して貫ひたい。然し洋禁画陳列中で八、第一眼につく呼べるものであ

花嫁が正面前を向く点は異なるようだが、晴着の帯の仕上をせる主題自体が、松園画の剽竒のように受け取られて

される作品であることを示唆するとも言える。

このことは第四回新古美術品展覧会に於て出版から一年を経た時点においてもなお、「人生の花」

が鮮明に記憶

上村松園《人生の花》の製作過程に関する一試論

四三
上村松園《人生の花》の制作過程に関する一試論

図10 今泉梅渓《婦人》「日本美術」第24号（明治33年11月）掲載図版

松園画「人生の花」に架け渡されるはずの絵が描かれないように見える点をはじめ、簡略化された描写が疑われる。このような注意力のある松園画「人生の花」が明治三十六年に飾り事として出品されている。松園は、明治三十六年に飾り事として出品されている「人生の花」を模倣した作品と解釈されても仕方ないだろう。

以上より、松園画「人生の花」は明治三十六年に飾り事として出品されている。伊藤雅人画より今泉梅渓画についても、松園を模倣した作品と解釈されても仕方ないだろう。
力的な、強い印象を与えた題材であったと言える。だが、先に引用した伊藤彦彦画への批評記事から察せられるよう
に、これらの松園画の類似作品は、単刀直入な言葉方をするなら現代では盗作とも見なされ得るものであった。松園
自身も、自作が他画家によって模仿されることは快く感じていなかった可能性はないだろう。

明治二十九年、京都では「人生の花」の題名で、人物を撮影した写真（図12）が新聞紙面で紹介されるに
し難い。写真が伝える場面は、着付けが未完成の時点を描くと推察される松園画「人生の花」とは若干異なるにせよ、題
名はともどより二人の人物の位置関係は自ずと松園画を考えさせる。当初、松園が「人生の花」と題して発表した図様
が、他者による変更を加えられながら松園の手元を離れ、世間で共有されるものとなる過程を示しているかも知れ
ない。

花嫁の着付けを描く「人生の花」の展覧会発表後、再び婚礼に取材した作品「花ござかり」の制作へと松園を導いた

図11 白瀧幾之助『花嫁』
（作者による編集）「二六新報」
明治33年10月29日掲載

図12 「人生の花　京都写真協会員相田和夫氏撮影」
「京都日出新聞」
明治39年3月27日掲載
上村松園《人生の花》の制作過程に関する二論

図16《花嫁雙幅》
「長崎新町藤木万助氏所蔵品」
（大正4年7月）掲載図版

図の下、自身が回想するように、単に花嫁と母親の対照的な姿を絵画化したいという願望はかりではなかったよう
に想われる。花嫁と母親の道を描く《花嫁》の図様を新たに考案し、展覧会出品することに定めた。この時、
模倣作品が生み出された結果、花嫁の着付けを描く図様が松園個人による様式として現れた。さらに、
松園の書簡に記された依頼画『人生の花』が完成当よりこの題名であったかを含めて検証されるべき点は多いが、
现存作品『人生の花』とは異なる図様を持つ、花嫁と母親を描いた下絵も伝来する（図13）。この
下絵の本画は現在知られ
ない。下絵に一致す
る図様ではないが、花嫁と母親を正面からの
視点でとらえるところが共通する作例を挙げ
よう。

なお、（図14）および《花嫁》（図15）と題
された作品は、今日独立した作品として個別
に所蔵されると推測されるが、本来は対幅で
あった可能性が高い。画面寸法、画面を占め
られた可能性が高い。画面寸法、画面を占め
人物の大きさの近似に加え、大正四年に京都美術倶楽部で催された売立の目録に、両者と同一と思われる作品が掲載される（図16）。これが根拠となる。花嫁のやや前かがみの姿勢、ほぼ正面を向く母親のすら、現在の制作年よりやや後の制作である可能性が指摘される。

明治30年代の馬場の資料によって花嫁の着付けを描く作品である。現存作品『人生の花』が、今後の題名で知られるに至った背景について推論を試みた。『人生之花』では「花嫁かり」を名付けられておしまいしない現存作品『人生の花』が、今日の題名で知られるに至った背景について推論を試みた。『人生之花』では「花嫁の着付けが仕上がる直前を描き、『花嫁かり』は馬場に向かう花嫁と母親を描く。両作品は、婚礼という晴れの日の時間的な推移を描いた連作とも考えられる点で興味深い。両者の差異についての可能性を改めて論じることとする。『人生之花』、『花嫁かり』、現存作品『人生の花』という数々の婚礼に取材した作品群が、松園の画業においてどのように位置付けられ、近代に至るかは、さらなる調査が求められる。
null
上村松園『人生の花』の制作過程に関する一試論

神崎憲一『京都に於ける日本絵画』京都美術院編、昭和四年、二〇〇頁

引用文の『日本美術院第五回展覧会』は『日本美術院第四回展覧会』の誤りであろう。

三点の現存作品『人生の花』が依頼制作によるものか否かを含め、制作年代、制作経緯についての詳細を提示できるよう、

注要について、上村松園談、中村達男編『青眉抄』昭和八年、六合書院、一四一―四五頁

本文の引用は省略したが、この回想では知人の婚礼を手伝った経験から着想を得たこと、花嫁や母親をスケッチし、そのような作業で活かした旨は明かされる。

明治二十七年に設立された京都美術協会が主催する新古美術展覧会は、近代作家による新制作作品が多数登場する。所轄の美術館の審査、第四回にわたる分野から出品され、第五回展では絵画に加え、彫刻、染物、織物、陶磁器などが展示された。
吉中光代「あとがきにかえて 人生の花・2点」ろうわしの京都
いとしの美術館

付記

本稿執筆にあたり、多くの方々のお力添えを賜りました。特に作品『母』『花嫁』に関しては、平塚市美術館平成五年

大学文学研究科研究員